

2023年3月(36号)

## JACET 北海道支部 Newsletter

〈北海道支部事務局〉

〒065-0013 札幌市東区北13条東3丁目1番30号

天使大学教養教育科 目時 光紀 研究室内

TEL: 011-741-1051 (代表)

Email: metoki0702 [@を入れる] gmail.com

URL: <http://www.jacet-hokkaido.org/>

〔巻頭言〕

コロナ後のわくわく感

JACET 北海道支部長

上野 之江

マスク着用無しの卒業式、新学期の授業は収容人数100%の教室で行うなど、コロナ前の日常が徐々に戻ってきました。JACET 北海道の会員の皆様におかれましては久しぶりに明るい春休みをお過ごしのことと拝察いたします。

2022年度を振り返ると、3年ぶりに支部大会、支部総会を対面で開催したことが一番印象に残っています。大きなチャレンジでした。オンラインでは難しかった対面での交流が実現しました。支部会員の皆さんが歓談する様子を見て思い切って対面にしてよかったと心から思いました。会場となった天使大学のご厚意に感謝いたします。

支部総会では支部紀要 *RBET* の発行形態について審議しました。支部の予算状況や他支部の動きを考慮し北海道支部も来年度から冊子体での発行を取り止め、オンライン化 (J-STAGE へ移行) する提案が承認されました。

支部大会の基調講演では、横山吉樹先生 (北海道教育大学札幌校) が、第二言語習得、社会言語学、会話分析などご自身の研究について話されました。横山先生は、2015年から2年間 JACET 北海道支部の支部長を務められ、2016年に北星学園大学で開催された JACET 国際大会の大会委員長もつとめておられます。研究発表では、大学英語教員を対象にしたインタビュー調査について、英語ディベート・トレーニングの導入案など実践的な研究と、英語教育の分野での実行可能な社会言語学的方策について考える理論的研究成果が披露されました。

今年は研究会の方も徐々に活発になり、第一回研究会では、評価に係わるルーブリックの利用やグループワークについて学びました。第二回研究会は JCA (日本コミュニケーション学会) 北海道支部、HELES (北海道英語教育学会) との合同研究会で、多義語指導のあり方や WTC (Willingness to Communicate) と English Learning Goals の関係について興味深い発表が続きました。どちらも骨子がしっかりした研究でした。道外からの発表者、参加者もいらしてオンライン開催のよさが出た研究会でした。コロナも少しずつ落ち着き、研究に力を注ぐ余裕が生まれつつあると感じています。

今年で2021-2022年度役員はその任務を完了し、2023年度からは松本広幸先生を支部長に新体制で新しい2年間が始まります。すでに支部大会の日程も6月24日(土)に決まっており、わくわく感が増しています。

第62回国際大会(東京、2023)は、8月29日(火)~31日(木)明治大学駿河台キャンパスアカデミーコモンで対面開催の予定です。Reframing Collaboration in Language Education and Beyond「言語教育における連携の再構築と発展」がテーマです。

会員の皆さん、研究に授業にこれからも切磋琢磨していきましょう。

#### 〔2022年度新入会員〕

4名の入会がありました。どうかよろしく願いいたします。

横倉 悠人(学生会員) 国際教養大学大学院生

濱田 裕介(一般会員) 北海道教育大学札幌校大学院生

柏 敬太(一般会員) 北海道教育大学附属札幌中学校

片岡 恋惟(学生会員) 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院大学院生

#### 〔2022年度支部総会〕

日時：2022年7月30日(水) 12:20 ~ 12:50

##### 〈報告〉

1. 支部長報告
2. 幹事報告
  - 2-1. 2021年度 事業報告
  - 2-2. 2022年度 事業計画
  - 2-3. 2022年度 人事
3. 各種委員会報告
4. その他

##### 〈議題〉

1. 2023年度 事業計画案
2. 2023年度 人事案
3. その他

〔2022 年度支部大会〕

日時：2022 年 7 月 30 日（土）13:00 ～ 16:30

場所：天使大学 2303 講義室（2 号館 3 階）

### 【基調講演】

「社会言語学を背景する第 2 言語習得研究を目指して」

横山 吉樹（北海道教育大学 札幌校）

第 2 言語習得研究を志す人の多くは、談話レベルのことは避ける傾向にあり、さらに、認知的な研究を嗜好する方が多いと思います。私はどちらかというと、人の言語を対象に研究しているのだから、その高度な領域に多少なりとも触れることができる研究に興味をもっていました。そういうこともあっても、談話レベルの言語（コミュニケーション）活動を社会言語学や社会学の知見を用いてアプローチするという研究を試みてきました。

本発表では、これまでの自身の研究活動を振り返り、どのような研究（者）に出会い、どのように啓発され、それをどのように論文の中に求めてきたのか話してみたいと考えています。一番感化を受けたのは、Jane Hill, Susan Phillips, Charles A. Ferguson, Ervin Goffman, Harvey Sacks など社会言語学や社会学の著名な方々の研究でありました。それらをどのように応用しながら自身の研究の中に取り入れようとしていったのか、英語教育の潮流に真っ向から逆らうことをせずに、迷いながら研究をしてきたその軌跡を自ら辿ってみたいと考えています。

### 【研究発表】

#### 1. “Critical Realism and Sociolinguistics”

Jeremie Bouchard (Hokkai-Gakuen University)

This presentation summarizes some of the ideas found in my recently published works which, together, call for a philosophy of sociolinguistics. Based on a critique of interpretivism, a prominent empiricist tendency in sociolinguistics, the presentation highlights principles guiding critical realist sociolinguistics as a viable alternative. These principles include (a) a layered, or stratified, view of social phenomena such as language, language users, and language education, (b) a robust approach to the formulation of causal claims, and (c) a commitment to objective knowledge. In closing, the presentation offers an argument in support for a universalist approach to sociolinguistics and social critique aligned with critical realism.

#### 2. 「授業活動におけるストレスへの対処過程—大学英語教員を対象としたインタビュー調査から—」

片岡 恋惟（北海道大学大学院）

現在の日本の大学では、教員になるための体系だった教育が義務付けられておらず、教育に関する知識やスキル、経験には大きな個人差がある。また、学生や社会の多様化、昨今の COVID-19 の影響など、それまでの教育経験にかかわらず、大学で教鞭をとる多くの教員が授業活動に関する悩

みや不安を抱えていることは想像に難くない。しかし、これまでの日本のストレス研究において、大学教員の抱える悩みや不安に焦点が当てられることはほとんどなかった。そこで本発表では、大学において英語授業を担当している教員が授業活動において生じたストレスに対しどのように対処しているのか、つまりストレスへの対処経験を教員としての成長のきっかけの一つとして捉え、その過程を明らかにすることを目的とする。具体的には、半構造化インタビューによって得られたデータを質的分析手法の一つである複線径路・等至性アプローチ（TEA）を用いて分析し、その結果について報告を行う。

### 3. 「英語ディベート・トレーニングの導入案：オックスフォード・ユニオンの示唆」

中谷 安男（法政大学）

英国の旧植民地であるコンウェルス 54 カ国と米国では、ディベートがリーダー育成の重要な方法と考えられている。ディベートでは、現代の様々な社会的課題について動議が与えられ、賛成・反対の立場から交互に議論を進めていく。最初の話者が、命題の定義を行い、後に続く話者は相手の議論を反証し、自分側の立場を有利にしていく。この際、内容の信頼性と妥当性を証明し、主張を第3者である審判団に説得する必要がある。このような活動を続けることで、SDGsに関する認識を深め、様々な知識を身に着け、課題の解決方法を考えるようになる。これは自立した学習者となり、客観的な交渉力を身に着けるのに有効な方法と言える。しかしながら、日本の環境でそのまま導入するのは容易でない。本発表では、世界最大のディベート組織のオックスフォード・ユニオンで行われている初級向けトレーニングについて考察を行い、日本の英語教育への示唆を行いたい。

〔2022 年度第 1 回支部研究会〕（Zoom によるオンライン開催）

日時：2022 年 11 月 3 日（木）18:30 ～ 19:35

#### 【研究発表】

#### 1. 「分析的ルーブリックの事前提示が口頭要約のパフォーマンスに与える影響」

濱田 裕介（北海道教育大学大学院 札幌校）

本研究は、評価に使われるルーブリックの事前提示が即興的な口頭要約のパフォーマンスの向上に有効かどうかを調査した。対象者は高校 2 年生 16 名、2 つのグループに分け、一方にはルーブリックの事前提示と説明をおこない、もう一方にはルーブリックの提示をしなかった。それ以外の処置は同様とし、最終的な口頭要約のパフォーマンスをルーブリックに基づいて評価した。その結果、2 つのグループに有意差は見られなかった。以上の結果を踏まえて、口頭要約においてルーブリックの効果を高めるためにはどのような活動や指導が必要であるかを考察したい。また、本研究においては、3 人の評価者が分析的ルーブリックを用いて評価をおこなった。その過程で得られた評価の信頼性を高めるための示唆を共有したい。

## 2. 「L2 グループワークのダイナミズムの可視化と分析」

三ツ木 真実 (小樽商科大学)

グループワークは、グループで取り組むタスク等を通じた学習者同士の相互作用や言語の産出が言語習得にポジティブな影響を与える利点があることから、多くの L2 教室で取り入れられている指導法の一つである。より良いグループワークの実践を検討していくためには、グループで生じている学習者のダイナミックなプロセスに焦点を当て、例えばそれぞれのグループ間のダイナミズムの違いや、その違いが生じた要因などを把握することが有用であると考えられる。本発表では、L2 グループワークにおける学習者同士のインタラクションを分析するための方法の一つである Poupore (2016, 2018) の Group work dynamic measuring instrument を取り上げ、分析の実践例を紹介する。

〔2022 年度第 2 回支部研究会〕 (Zoom によるオンライン開催)

日時：2023 年 3 月 4 日 (土) 13:00 ~ 15:50

### 【研究発表】

#### 1. 「英語の多義語指導のあり方ー多義語の定義から見る指導の考察ー」

飯島 尚憲 (慶應義塾大学大学院)

本研究では、英語の語彙学習における多義語の教え方を、認知言語学における多義語の定義から考察をする。従来、認知言語学における多義語の定義は「1つの言語形式に複数の関連した意味のある言葉」(Goddard, 1991, 他多数)と考えられており、それが前提のように一人歩きしている様子がある。しかし、この中の「関連した」というのは、どのように学習者の間で関連づけが行われているのか非常に曖昧なものになっている。そこで、本研究では、英語学習の状況を質問紙調査をしたのち、複数の英語の語義を学習者に提示して、統計的手法により語の意味同士と学習者の関連づけ度合いを調査した。結果として、多義語かそうではないかの決定は学習者の語の関連付けによることが多いことが示された。具体的に、どのような言葉がどのように関連づけられているかという「認知的な側面」を紹介する。また、そこから多義語の指導法を示唆する。

#### 2. “An Inquiry into Willingness to Communicate and English Learning Goals among Japanese EFL Learners”

Satomi Fujii (Hokkaido University)

Previous research has demonstrated that having specific learning goals improves task performance and academic achievement (e.g., Locke, 1996; Schnell et al., 2015). Furthermore, learners who make daily efforts to achieve their goals have the potential to communicate successfully in the target language (Gregersen & MacIntyre, 2014). However, research to date has not yet determined the interactions between English learning goals and willingness to communicate (WTC). This study examined the differences in English learning goals and

specific actions for goal achievement according to WTC levels among Japanese EFL learners through qualitative analysis. As a result, high-WTC learners tended to have high-level goals, and low-WTC learners tended to have the lowest possible goals. Moreover, high-WTC learners tended to take a variety of specific actions for goal achievement, whereas low-WTC learners took rather general and common actions. Data showed clear differences between these two groups of learners.

### 【講演】

「日本の EFL 環境での効果的英語授業の設計：理解・練習・繰り返しを重視して」

佐藤 臨太郎（奈良教育大学）

近年、教師からの知識の伝達や練習を最小限に抑えた、生徒主体の活動を重視した、いわゆる student-centered の授業を構築すべきという流れがある。母語習得過程や第 2 言語習得理論とも整合性がありそうで、発表者もその理念は否定しないし、むしろ選択的有効活用を支持する。しかしながら、日本の EFL (English as a Foreign Language) 学習環境において、特に中高（小？）での公教育において、この理念をメインに据えることが、本当に効果的・効率的、かつ公平・公正であるかは疑問である。本発表では、理解・練習・繰り返しを重視した、発表者が日本の EFL 環境において効果的だと考える英語指導について提案する。

〔編集後記：2022 年度を終えて〕

長引くコロナ禍を経て、ようやく世界が動きを取り戻し始めました。対面による授業や研究会を再び行えるようになったことにありがたみを感じるとともに、今回の経験で得た遠隔授業の実践スキルやノウハウの蓄積は、新たなフェーズに入った教育の現場にも必ず活かされていくことでしょう。新年度の支部活動においても、闊達な意見・情報交換が行われていくことを楽しみにしています。(M)